

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）  
セッション討議内容の記録

|                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| セッション名：コンパクトシティ                  |                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 日付：11月1日（土）曜日、セッション時間：9:00～10:30 |                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 司会者名（所属）：谷口 守                    |                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 討<br>議<br>内<br>容                 | <p>セッション全体：</p> <p>人口減少時代における将来の都市構造のあり方として、コンパクトシティが提案されているが、そのための方策や効果についてはまだ様々な点で今後の研究が待たれている。本セッションでは(31)規範的なモデル分析、(32)人口密度に着目した自動車利用の弾力性分析、(33)アクセシビリティ指標を用いた都市構造評価という異なる観点から、下記のような興味深い研究成果と討議がなされた。</p>                                                          |
|                                  | <p>（３１）溝上章志（熊本大学）：</p> <p>規範的なモデル分析を通じ、居住者の効用水準を下げることなく、公共交通などの有効活用を通じて、現在よりも総エネルギー消費量を少なくすることが可能であることが初めて示された。また、分析された効果の中身について、トリップ長が変化しているのか、それとも公共交通への転換が主なのかということについて、分離して観察してみたいという希望が出された。</p>                                                                   |
|                                  | <p>（３２）谷下雅義（中央大学）：</p> <p>Self Selection バイアスに着目することの意義についてわかりやすく整理され、対応する分析手法として Latent Class Regression に関する長所と限界について議論がなされた。政策に直結できる観察可能な個人属性に、どこまで配慮することが適切であるかについては多様な意見が出された。実際は限定的な住宅タイプ供給の現状との対応についても考慮する必要が指摘され、我が国で分析を行うためには世帯ベースのデータ整備が不可欠であるという認識が示された。</p> |
|                                  | <p>（３３）木下和昭（タカハ都市科学研究所）：</p> <p>金沢における交通手段ごとのアクセシビリティ指標算出を通じ、交通行動とアクセシビリティ指標の間には一定の乖離があることが示された。高齢者層などをターゲットにした今後の分析への期待が述べられ、公共施設や教育施設などもアクセス先施設として考慮できないか、足切り基準として、居住者の意識を反映した形で基準値の再検討できないかといった意見が出された。</p>                                                          |